



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2013年4月21日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト フルート四重奏曲 第3番 八長調 K. 285b

第1楽章 *Allegro*

第2楽章 *Andantino con variazioni*

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト セレナーデ 第13番 ト長調 K. 525 『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』

第1楽章 *Allegro*

第2楽章 *Romance: Andante*

第3楽章 *Menuetto: Allegretto*

第4楽章 *Rondo: Allegro*

————— 休憩（10分間） —————

ヨハネス・ブラームス ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op. 34

第1楽章 *Allegro non troppo*

第2楽章 *Andante, un poco Adagio*

第3楽章 *Scherzo: Allegro*

第4楽章 *Poco sostenuto – Allegro non troppo – Presto, non troppo*

フルート：金井 麻子
ピアノ：大月 礼子
ヴァイオリン：宇野 格
孫 尚卿
ヴィオラ：林 俊夫
チェロ：坂本 謙太郎

2013年4月21日(日) 14時00分 開演
ティアラこうとう 小ホール

ある録音テープに残された会話
～曲目解説に代えて～

・・・ガヤガヤ・・・

A：ほお、これは超のつく名曲だね。
クラシック音楽はあまり知らない
君も絶対聴いたことあるはずだよ。

B：どれですか？

A：“アイネク”だよ。

B：愛ね苦？

A：いや、アイネ・クライネ・ナハトムジーク(Eine kleine Nachtmusik)。
これを略してアイネクというのが
通で…。

B：通？むしろダサイですけど。それ
で、そのアイネ・クライネ…って
どういう意味なんですか？

A：英語で言うと A Little Night
Music、明治の日本人は“小夜曲”
と訳しているね。

B：ああ、その方が粹な感じですね。
しかし、何で「夜」なんですか？

A：中世のヨーロッパには、夕暮れ時
に恋人の家の窓の下で音楽を演奏
するという伝統があったんだ。

B：へえ、ロマンチック。夏のヨーロッ
パの長い夕暮れ。外から音楽が聴こ
えて来る…。

A：良いでしょ。で、その音楽のこ
とをセレナーデというんだ。アイネ・
クライネ・ナハトムジークはモー
ツァルトが作曲した 13 番目のセレ
ナーデの愛称だよ。

B：13？随分作曲したんですね。何
か共通した特徴はあるんですか？

A：いや、セレナーデは恋人に聴かせ
るラブソングだから、堅苦しい決ま
りがあるというものじゃない。比較

的軽い音楽で、楽章が 6～10 と多い
のが強いて言えば特徴かな。延々と
演奏し続けるためだろうね。野外で
ちゃんと聴こえるようにするため
なのか、多くの管楽器が入っている
ことも珍しくない。

B：でもこの曲は“Little”なんで
しょ？

A：そう。弦楽器 4 人の小編成で、楽
章も 4 つしかないからかな。モー
ツァルトの他のセレナーデと比べ
ると確かに小じんまりまとまっ
ている。でも、この愛らしい名前のお
蔭もあって、超有名だね。

B：どんな曲でしたっけ？

A：それは聴いてのお楽しみ。始ま
った瞬間に「ああ、あれ」って思うよ。
それにしても、この曲って意外と生
演奏で全楽章聴く機会がないんだ
よね。有名過ぎて演奏する側が小っ
恥ずかしいからなのかな。

B：有名な曲は有難がらない通ぶった
聴衆のせいじゃないですか？

A：ぐっ。

B：前半のもう一曲、フルート四重奏
曲もモーツァルトですね。

A：フルートと弦楽器 3 人で演奏する
曲だね。モーツァルトはフルート四
重奏曲を全部で 4 曲書いていて、フ
ルート奏者にとっては数少ない、貴
重なレパートリーだ。

B：フルートの曲が少ないという意味
ですか？

A：そう。オーケストラではともかく、

少人数の室内楽ではフルートって扱いにくい楽器なんだよね。特にこの四重奏という編成は、モーツァルト以外に聴いたことがないし、モーツァルトもこの曲の作曲には結構苦労したみたい。

B：わざわざそんな難問に挑戦するなんて、天才と呼ばれる人はすごいですね。

A：いや、そんなに良い話じゃないよ。お金持ちのフルート愛好家に頼まれて、大急ぎでやった仕事らしい。

B：へえ、そのお金持ちのお蔭でその後のフルート奏者は貴重なレパートリーを手に入れた訳ですね。しかし、嫌々のやつつけ仕事とは…。

A：おっと、そこは誤解しないで。モーツァルトの曲は大概誰かに頼まれた仕事だし、べ切に追われるのもいつものことだった。常にそんな環境でも素晴らしい曲を書き続けていることこそ天才らしさな訳で…。

B：現代でもマンガやテレビドラマの制作現場はいつもべ切に追われていますよね。べ切こそ創作の原動力とも言いますし。

A：言うのか？ ところで、このフルート四重奏曲第3番は、モーツァルトの作品の中でも少し謎めいている。例のお金持ちの依頼で仕事をしたのが1777-8年なので、第3番も第1番、第2番と一緒にこの時期に作曲されたと考えられていたんだ。ところがある時1781年頃のメモの中から、この第3番の草稿が見つかって、研究者はパニックに陥った。

B：研究者って細かいこと気にするんですね。

A：まあね。もう一つの謎は第3番の第2楽章が、彼のセレナーデ第10番『グランパルティータ』の第6楽章とまったく同じだってこと。

B：同じ？

A：そっくり同じ音楽を違う楽器編成に変えてあるんだ。これはモーツァルトには珍しい。写譜や編曲をするくらいなら、新しい曲を書いた方が早いって人だからね。このあたりの事実から、この曲自体誰か別人の手によるものかも知れないという疑惑が出て来る訳。

B：贋作疑惑!! なるほどそれは気になりますね。で、その真相は？

A：これは僕の想像だけど…第一楽章は1777-81年のどこかでモーツァルトが作曲したんだろうと思う。1788年になって出版しようとした時に、第1楽章しか作っていなかったことに気付いた。外では編集者がドアをガンガン叩いている。で、慌てて弟子に「おい、グランパルティータの第6楽章で良いから、フルート四重奏に編曲して、あいつに渡して追っ払え」と。

B：あはは。その大慌てっぷりを想像するとおかしいですね。でも、いつの時代も仕事ってそんなもんかもしれないですね。

A：そうだね。でも後半に演奏される**ブラムス**の仕事の仕方は対極的だったみたいだよ。

B：ブラムス？ あ、知ってます、ハンガリー舞曲の作曲家でしょ。小学校の学芸会で演奏しましたよ。チャップリンの曲ですよ。

A：たしかに『独裁者』でチャップリン扮する床屋があの曲に合わせて髭剃りをする場面の印象は強いけど、あれはブラームスの曲にチャップリンが合わせたのであって、その逆じゃないからね。

B：そうだったんですか。そのブラームスは時間に追われる仕事の仕方ではなかった？

A：全然。夏、避暑地に出かけて、のんびりしながら、じっくり時間をかけて作曲するというスタイルだったらしい。バカンスの間に粗々仕上げておいて、秋、演奏会シーズンが始まると街に帰って、仕上げをするというパターンだったみたいね。

B：優雅ですね。モーツァルトに比べると一曲作曲するのにかける時間もだいぶ長そうですね？

A：その通りだね。モーツァルトは思いついたものをサラサラっと書きつけてお終いという雰囲気だけど、ブラームスは一回書いたものを何度も推敲するタイプ。交響曲第1番の作曲に20年かけたというのはよく知られたエピソードだよ。

B：20年！？ 粘着系ですね。今日のピアノ五重奏曲もそんな感じだったんですか？

A：着手が1862年の夏。完成が1864年の秋だから、丸2年だね。

B：20年という話を聞いた後では、短く感じますね。

A：期間はね。だけどその間の手の入れようは半端なく粘着系だよ。この曲は最初ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ2という弦楽五重奏だった。それが2台のピアノのための曲に書き改められ、最後にやっとピアノ1、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1という今の形（ピアノ五重奏）に落ち着いたんだ。

B：激しい変貌ぶりですね。楽器編成を2回も変えてしまうなんて。たった1回で贋作を疑われるモーツァルトと対照的ですね。

A：ははは。確かにここまでのしつこく大々的な推敲も珍しいよね。1865年に楽譜を出版した後も改訂を続けたっていうんだから…。

B：でも、それだけの価値はあった？

A：そうだと思うよ。天衣無縫という言葉があるけど、この曲はまさにそれだね。とても他の楽器編成だったとは思えない。トコトン緻密に作りこまれた重厚な第1楽章はブラームスの真骨頂。第2楽章になると、一転して春の陽だまりを思わせる優しげな…

B：ストップ!! それは私が聴いた時のためにとっておいてください。

・・・チリンチリン・・・

B：ほら、開演のベルですよ。

A：そうだね。ウンチク抜きに、聴いた通り自由に感じるのが一番だね。じゃあ、ゆっくり楽しもうか。

以上は演奏記録用に設置された録音テープに残された客席の会話を文書化したものです。声の主は不明であり、従って、内容に関して音楽学的見地からの真偽は確認されておりません。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当。初回の演奏会がこの時期だったことが団体名の由来になっている。以来この時期の演奏会開催が多いが、語感の爽やかさとは裏腹に、日本では梅雨に当たるのが悩みの種。

演奏会のたびに「いつか演奏したいと思っていた曲」を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜している。楽器編成・メンバーは毎回変わるため、これまでの出演者は社会人・学生・主婦・職業音楽家まで38名にものぼる。

これまでの演奏会

第1回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 四短調 Op. 115

第2回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」 Op. 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 二長調「アメリカ」 Op. 96

第3回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285／オーボエ四重奏曲 二長調 K. 370

アダージョとロンド 八短調 K. 617／ピアノ四重奏曲 第1番 二短調 K. 478

第4回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 変ホ長調 Op. 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 二長調「罇」 Op. 114

第5回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ 二長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第1番 二長調 Op. 11

房音くらぶ 音楽祭（2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール）

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 二短調 K. 516 より第1楽章

第6回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：木管五重奏曲 八短調（弦楽五重奏曲 第2番 K. 406 の編曲版）

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 Op. 20

クリスマス・コンサート（2006年12月17日 於：西千葉 カフェ・エラブル）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

ヴィヴァルディ：『四季』より「冬」 他

第7回 (2007年5月13日 於：ティアラこうとう 小ホール)

ベートーヴェン：アダージョとロンド（六重奏曲 変ホ長調 Op. 81b より）

ボロディン：弦楽四重奏曲 第2番 ニ長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第17番 ニ長調 K. 334

第8回 (2008年6月29日 於：ティアラこうとう 小ホール)

バッハ：管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

シューベルト：八重奏曲 ヘ長調 D. 803

美浜音楽祭 (2009年3月21日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調 Op. 49（フルート版）

第9回 (2009年6月21日 於：ティアラこうとう 小ホール)

シェーンベルク：浄夜（弦楽六重奏版）Op. 4

ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番 変口長調 Op. 18

第10回 (2009年11月22日 於：ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 ニ長調 K. 285

プーランク：ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲 ニ短調 Op. 70「フィレンツェの思い出」

2010年霧降の森ジョイントコンサート (2010年6月13日 於：日光フィンチホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 ニ長調 K. 285 より第1楽章

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番くらすモフスキー第1番 > Op. 59-1 より抜粋

バッハ：管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067 より“Badinerie”

第11回 (2010年7月3日 於：ティアラこうとう 小ホール)

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番くらすモフスキー第1番 > Op. 59-1

ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op. 139

幕張ベイタウンコーラスの集い (2010年10月31日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『フィガロの結婚』より抜粋

第12回 (2010年12月12日 於：ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第4番 イ長調 K. 298

シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 「死と乙女」 D. 810

ベートーヴェン：クラリネット三重奏曲 変口長調 「街の歌」 Op. 11

シュトラウス／シェーンベルク：皇帝円舞曲 Op. 437（七重奏版）

第13回 (2011年11月13日 於：聖路加国際病院 トイスラー記念ホール)

モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K. 581

ラヴェル：弦楽四重奏曲 ヘ長調

サン＝サーンス：七重奏曲 Op. 65

出演者の横顔

フルート：金井 麻子

10歳でフルートを、15歳でオーケストラ活動を始める。上智大学管弦楽団、オーケストラ・ディマンシュ、幕張ベイタウンオーケストラ、美浜音楽祭祝祭管弦楽団等で首席奏者を歴任。結婚後姓は変わっているはずだが、チラシ制作担当者が変え忘れたため、以後旧姓で通している。現在は子育ての傍ら、メシドール・アンサンブル公認専属炊事係（飯どーる）を務める。

ピアノ：大月 礼子

幼少より大月投網子氏、石澤秀子氏に師事。高校2年終了後渡米しジュリアード音楽院、ニューヨーク市立大学ハンターカレッジにてピアノをレオナード・アイスナー氏、ルイズ・タルマ氏に師事。ジーナ・バクハウワー、シュラ・チェルカスキー、マグダ・タリアフェロ各氏の公開ピアノレッスン生に選抜される。ニューヨーク市クイーンズボロー・オーケストラ、ハンターカレッジ・オーケストラ、ジュリアード・オーケストラと協奏曲を協演。近年は東京プロムナード・フィルハーモニカーとモーツァルト協奏曲第24番、ベートーヴェン協奏曲第4番、同門フジコ・ヘミングとピアノ連弾・2台ピアノで協演。

第一ヴァイオリン：宇野 格

4歳よりヴァイオリンを始め、高校、大学、IT企業とそれぞれの所属先でオーケストラに属し、コンサートマスターを務める。聴いた曲はジャ

ンを問わず即座にヴァイオリンで演奏できるという特殊能力を持ち、当団演奏旅行中は朝のラジオ体操の伴奏を担当する。

第二ヴァイオリン：孫 尚卿

ピアノを柳桂子氏、ヴァイオリンを上月恵氏・金田幸男氏に師事。早稲田大学交響楽団で第二ヴァイオリン首席奏者を務める。学生時代に当団主宰者の職場でアルバイト勤務。その働きぶりを踏まえた「君は研究者よりも営業向き」といういい加減な助言を真に受けて、セールスエンジニアとして計測器メーカーに就職。今のところ生き生きと働いているようなので、主宰者も一安心である。

ヴィオラ：林 俊夫

5才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジックフロー、アンサンブル 70sなどでコンサートマスターを歴任。30代半ばよりヴィオラに取り組み、現在は林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事。某独立行政法人勤務の傍ら、月何回か演奏会に出演している。

チェロ：坂本 謙太郎

13歳からコントラバスを始め、15歳でチェロに転向。アンサンブルムジカ、江東オペラ管弦楽団等で首席奏者を務める。菅野博文氏（昭和音大教授）、F.バルトロメイ氏（ウィーンフィル首席奏者（当時））らに師事。当団を主宰する傍ら、経営コンサルティング会社に勤務している。

当ページの内容は若干の誇張と多分な言葉遊びを含んでいます。



メシドール・アンサンブルの公式ウェブサイト

<http://artist.musicinfo.co.jp/~messidor/>

出演者の詳細なプロフィール、今後の活動予定、これまでの録音・プログラム等を公開しています

